

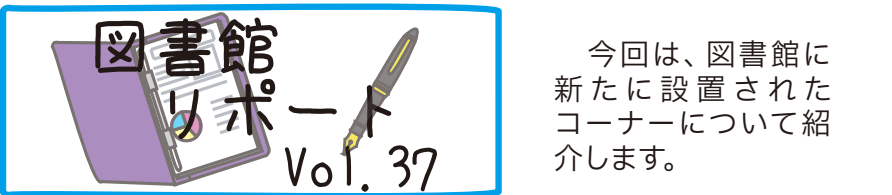


花鳥風月

雪が降り、最低気温が氷点下を下回る日も多くなってきました。これからの北海道は、あたり一面真っ白ですね。皆さんの中でも、冬＝白色という等式が出来上がっている人は多いのではないのでしょうか。

季節と色を関連付ける考えは古くからあり、その考えは言葉にも現れています。代表的なものは青春。青春の語源は、紀元前に中国の鄒衍（すうえん）によって創られた五行思想です。そして、その五行思想が由来となっている冬の言葉が「玄冬」です。玄冬を構成するのは、黒を意味する玄と冬の文字。雪国に住む私達にとって、冬と黒を対応させることは馴染みのない考えでしょう。黒い冬と聞くととにかく悪いことのようにですが、実はそうではありません。諸説はありますが、人の一生を四季に例えるとき、青春より先に出てくる言葉が玄冬であり、玄冬は四季の中でも初めに位置しているとされています。それこそ青春は私達のような年代を指す言葉として使われていますが、春の前に必ず冬があるように、青春の前にも玄冬が位置しているのです。

こつこつと努力を積み重ね、春の陽を夢見る皆さん。来年の春、そんな皆さんに笑顔の花が咲くことを願って。（ 〇 ）



きよし図書読む

現在図書館ではクリスマス風の装飾を実施中です。そこそこ大きいクリスマスツリーと、少しおめかしした館内のマスコット達があなたを待っています！私達のクリスマスは講習に潰されてしまうので、今のうちからクリスマス気分を楽しんでみてはいかがでしょうか。

また、特集コーナーではマンガ特集を開催しています。有名作や隠れた名作に加えて、先生のおすすめなどを紹介しています。

冬を迎え、クリスマス仕様となった図書館にぜひお越しください。（ 〇 ）



↑新設されたマンガ特集



大好きな仲間が殺されたとして、あなたならどうしますか？復讐、という方も多いと思います。

今回紹介する本は、そんなときに復讐を選ばなかった魚のお話。皆さんご存知、『スイミー』です。

この物語は、共に生きてきたスイミーのきょうだいたちがみんなマグロに食べられるところから始まります。一人逃げ切ったスイミーは、恐怖と悲しみを抱えながら海を彷徨い沢山のものに出会うのですが、その中で知ったのは世界の大きさ、美しさ、そして未来があること。復讐ではなく、先を見つめて生きていくことを、スイミーは静かに決意したのではないのでしょうか。

絵本も久しぶりに手にとってみると面白いです。よし、図書館に行こう！（ 〇 ）

東日本大震災から半年。生計を立てるために犯罪に手を染めたその「男」は、ある犬と出会います。名前は、多聞（たもん）。多聞は突然人々の目の前に現れ、出会いと別れを繰り返しながら旅を続けています。いつでも凛々しく頼れる多聞は、ときどき寂しそうな目で南西を見つめていました……。泥棒や夫婦、娼婦など色々な人と生活しながら旅をする多聞は非常に愛らしく、また多聞はもちろんのこと、多聞に徐々に心を開いていく個性あふれる登場人物たちがとても魅力的です。この本は、殺伐とした私の日々の癒しを与えてくれました。

犬を飼っている人にも、飼っていない人にもおすすめできる一冊です。（ 〇 ）



このコーナーでは、局員が今までに読んだ本を評価とともに紹介していきます。

この短い人生を、わざわざ自我を殺して歩んでいくことに、意味はあるのだろうか。

……。否。この世界はそれほど、息苦しく生きていく必要のある世界ではない。むしろ、自分以外の人間の言うことに流されてしまって、結果自我を殺して生きることは、人生に対する冒涇ではないだろうか。

何が本当で、何が嘘なのか。そんなことは誰にもわからないが、異論も持論も、それらは真偽にかかわらず ”無下”にされるべきではないもの“であることは確かであろう。

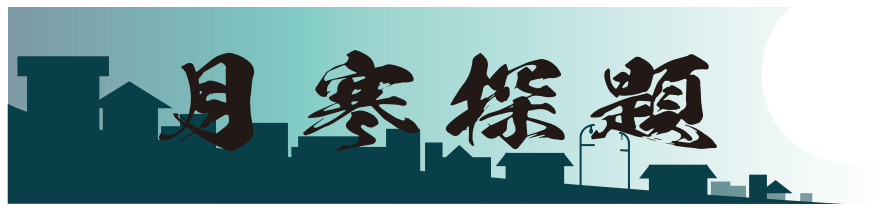
たとえ周囲に受け入れられない論であったとしても、それが論である限り、支持する者は必ずいる。もしそれを探す気があるのであれば、諦めるより先に、反論するより先に手に取るべき本を、ここに。

こちらの、『オタクを武器に生きていく』は、『14歳の世渡り術』というシリーズの作品のひとつです。心情の複雑さに拍車がかかる年代に向けたエッセイ本となっているせいか、スッと読める200ページでした。（ 〇 ）



『オタクを武器に生きていく』 吉田尚記 著 / 河出書房新社

オタク度	★	★	★
読みやすさ	★	★	☆
話の信憑性	★	★	☆



『利尻島から流れ流れて本屋になった』の著者、工藤志昇氏へのインタビュー！

「別にどうってことない瞬間に、ふと故郷の記憶が頭に浮かんでくるのである。どうせやることのないのなら、それを自分なりに綴ってみよう。」

『利尻島から流れ流れて本屋になった』はこの言葉のとおり、著者が日々のふとした瞬間に見出す故郷、利尻島の思い出が綴られたブログをまとめたエッセイ集だ。

著者は札幌駅の三省堂で働く書店員であり、月寒高校の卒業生である工藤志昇さん。私達の先輩だ。多忙にもかかわらず、工藤さんにお話を伺える貴重な機会を得た。そこから印象に残った所を紹介したい。



↑月高OBの工藤さん。高校時代は野球部だったそう。

【ブログを始めたきっかけ】

書店員という仕事上休日が他の職種とは違う、趣味もあまりない、何もすることがない...という状況で新型コロナウイルスが蔓延。家にいる時間がますます多くなった2021年に、このブログが始まったそう。（現在も定期的にブログは『note』に投稿されているのでぜひ調べてみよう。）

【出版の経緯】

札幌の出版社、寿郎社の方に「本にしてみないか」と持ちかけられた事で、書籍化された。この“チャンス”があったことは幸運だったと語る。

【故郷利尻島への想い】

札幌から利尻島に行く手段は二つあり、一つは丘珠空港からの航空便、もう一つは稚内からフェリーに乗る方法である。もちろん空路の方が移動時間は短い。工藤さんは帰省時、冬で雪が降ると航空便を利用するそうだが、雪の降らない季節は稚内からのフェリーに乗る方法を選択するそう。稚内までの道の『日本海オロロンライン』というものがある。この道は稚内までを結ぶただひたすら一直線の道だ。その海沿い、稚内に近づくにつれて見えてくる利尻島の絶景は夢幻のようだろう。島に住んでいたころは気にならなかった空や海の青の深さ、道に咲くハマナスやひなげしなどの花の名前にも関心を向けるようになったと語る。高校、大学で島の外に出たからこそ気づく郷里の美しさがあることは感慨深く、その経験をし得ることを、札幌育ちの私は取材中羨ましくも感じた。



『利尻島から流れ流れて本屋になった』 工藤志昇 著 / 寿郎社

【月高生に一言】

取材の終わりに、月高生にメッセージをお願いした。「自分も文章を書いて新たな人間関係が広がった。自分なりに文章を書いたり、自分のやっていることをちゃんと見てくれる人がいて、そこから人間関係の輪が広がっていくことでいろんなことにチャレンジができること、それを続けていけばより豊かな人生を送れるんじゃないかということを書き込んで感じましたね。」と語ってくれた。今回の取材も、人との繋がりがきっかけとなってくれたこともある。成人と子どもの狭間にある今の私達に響くメッセージだ。

本取材では、主な流れや方向性がおかしかなど不安が大きかったのだが、筆者の拙い質問や言葉を丁寧に拾って答えてくださり、図書局や進路の話などこちらの話も沢山聞いてくれたおかげで緊張せずに取材に臨むことができた。改めて取材を受けてくださった工藤さん、ありがとうございました。

なお、『利尻島から流れ流れて本屋になった』は工藤さんのサイン入りのものが図書館にあるので、ぜひ手に取って欲しい。（ 〇 ）